

## 複合施設の世代間交流に関する考察

氏名：上田洋平

## 内容

序論.....	2
第一章 やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩の現状と問題点.....	3
第一節 現状 .....	3
第二節 日常的な交流の実現に対しての問題点.....	4
第二章 日常的な世代間交流の実施.....	5
第一節 実施方法 .....	5
第二節 日常的な世代間交流をする高齢者と障がい児の様子と変化.....	6
課題 継続した交流に関して .....	7
参考文献 .....	8

## 序論

地域密着型通所介護施設やすらぎ家北小岩亭と放課後等デイサービスにじ北小岩はそれぞれを高齢者と障がい児が利用する複合施設である。やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩では不定期に世代間交流<sup>1</sup>イベントを開催しているが、世代間交流イベントは多くても月に一回程度の開催のみとなっている。

世代間交流に関して、南部（2013）は子どもにとって育ちを支援し高齢者へのポジティブな認識をもたらすとともに、社会的活動への参加を促す原動力となり、高齢者にとっても今までの経験や知識が生かされることで、自尊感情や有用感が高まることを報告している。また、吉津・溝邊（2017）は、子どもは高齢者の生きてきた歴史からの学びを得ること、学力の向上、学習環境の適用化、社会的価値観、社会的スキル得ることができ、高齢者は社会的孤立間の軽減、新しいスキルの獲得、社会への貢献意欲の充実に伴う自己実現の機会を得られることを報告している。また、生活に関わる活動や宿題を一緒に行う等の日常的な活動を世代間交流プログラムとして行うことによって、子どもと高齢者相互に教育的な効果がある可能性も報告している。福岡・原・小野（2016）も、複合施設における子どもとの交流が高齢者にもたらす効果として、日常的に繰り返される交流により家族のような存在となり高齢者が必要とされていると感じ、存在価値を確認できると報告している。これらの報告から、通所介護施設の役割<sup>2</sup>と放課後等デイサービスの役割<sup>3</sup>を実現するためにも日常的な世代間交流は効果的だといえる。特に、高齢者が自己実現の機会を得ることは、通所介護施設に来所した高齢者が意欲をもって活動に取り組む大きなきっかけになるといえる。

しかし、やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩亭は複合施設でありながら、高齢者と障がい児が施設に通えば関わられるような日常的な世代間交流を実現することができていない。そこで、やすらぎ家北小岩とにじ北小岩でも高齢者には機能訓練につながり、障がい児には健全な育成につながるといったお互いに良い影響を与え合う日常的な世代間交流を実現させる。

---

<sup>1</sup> 世代間交流とは、「異世代の人とのかかわりの中で、子ども達が自主的に何かを感じ、学び、自分自身に活かそうとする態度を芽生えさせることができるような交流」のことである。また、子ども達とその交流の相手となった者、「双方に価値のある交流」でなければならない〔鈴木（2010）「世代間交流とは何か」〕

<sup>2</sup> 通所介護の事業は、要介護状態になった場合においても、その利用者が可能な限り、その居宅において、その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう生活機能の維持又は向上を目指し、必要な日常生活上の世話及び機能訓練を行うことにより、利用者の社会的孤立感の解消及び心身の機能の維持並びに利用者の家族の身体的及び精神的負担の軽減を図るものでなければならない。〔厚生労働省（1999）「指定居宅サービス等の事業の人員、設備及び運営に関する基準」〕

<sup>3</sup> 放課後等デイサービスは、支援を必要とする障害のある子どもに対して、学校や家庭とは異なる時間、空間、人、体験等を通じて、個々の子どもの状況に応じた発達支援を行うことにより、子どもの最善の利益の保証と健全な育成を図るものである。〔厚生労働省（2015）「放課後等デイサービスガイドライン」〕

## 第一章 やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩の現状と問題点

本章では、やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩の現状を確認したうえで、日常的な交流の実現に対しての問題点について記述する。

### 第一節 現状

やすらぎ家北小岩亭の高齢者は保育園の園児やボランティア、地域小学校の子ども、地域短期大学の生徒との世代間交流を不定期で実施しており、併設しているにじ北小岩ともハロウィンやクリスマス等の世代間交流イベントを不定期に開催している。そのため、やすらぎ家北小岩亭の高齢者は不定期に世代が異なる人と関わることはあっても、日常的に世代の異なる人と関わることはない状態となっている。やすらぎ家北小岩亭の高齢者は入浴や食事、体操や脳トレプリント<sup>4</sup>などをして過ごしているが、余暇時間<sup>5</sup>は多くあるため、世代間交流の時間を確保しやすいといえる。やすらぎ家北小岩亭を利用される高齢者の中には傾眠が多くなり、活動への参加が少なくなっている高齢者もいる。

にじ北小岩の障がい児は施設内での人間関係のほとんどが職員や他の障がい児との関係性だけとなっている。高齢者と廊下ですれ違う際にあいさつをすることもあるが、自発的なあいさつは少なく日常的な光景にはなっていない。障がい児のにじ北小岩への来所時間は学校の下校時間によって異なるため、来所後は個々の机の前に貼ってあるスケジュールボードの内容に沿って活動を行っており、スケジュールの内容が終わったら各々が余暇時間を過ごす流れとなっている。スケジュールは、1. 連絡帳・水筒を出す、2. 手洗い、3. 体温を計る、4. 宿題プリント<sup>6</sup>、の順番となっている。宿題プリントは各々で取り組み、宿題プリントができたらにじ北小岩の職員に採点をしてもらう流れとなっている。

やすらぎ家北小岩亭の高齢者とにじ北小岩の障がい児が施設内で交わる生活動線は玄関から入った後の廊下のみとなっている。お互いに玄関を使用する主な時間帯が異なるため、高齢者と障がい児が顔を合わせない日もできている。複合施設ではあるが、やすらぎ家北小岩亭の高齢者とにじ北小岩の障がい児が活動する部屋はそれぞれ異なっており、活動場所は制限されている。

やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩の両職員からは、現状よりも施設内での世代間交流を促進したいと意見が出ている。これ以上は世代間交流を促進したく

---

<sup>4</sup> やすらぎ家北小岩亭の職員が用意した計算や塗り絵、クイズ、早口言葉などが取り組めるプリント。

<sup>5</sup> ここで使用している「余暇時間」とは、余暇に行われる一元的な活動（レクリエーション活動）も余暇のひとつの定義と位置づけ、人間を成長させ、自由に、自分に秘められた想像力や能力を広げ、生活を豊かにしていく可能性のある活動を余暇と捉える。〔森山・土井（2009）「日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題」〕

<sup>6</sup> にじ北小岩の職員が個々の障がい児に能力にあわせて作成をしたプリントである。内容は算数や漢字、線をなぞるものなどがある。

ないなど、否定的な意見は出てこなかった。促進したい理由として、やすらぎ家の高齢者は子どもが好きだから関わる時間を増やしてあげたい、子どもが関わると高齢者はいつも見せないような優しい表情になる、子どもには高齢者と関わることで思いやりの心を育てほしい、高齢者からあいさつなどのマナーを学んでほしいという意見が出た。一方で、世代間交流をすることによって感染症や事故、職員の負担が増えるのではないかと不安も意見として出た。

## 第二節 日常的な交流の実現に対しての問題点

やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩の両職員は高齢者と障がい児に日常的な交流をしてほしい気持ちを持っているが、実際には日常的な交流はされていない。ゆえに、高齢者と障がい児が日常的な交流でお互いに良い影響を与え合う機会をなくしてしまっているといえる。

北村(2003)は複合施設であっても交流をするには施設側の主体的な取り組みが必要なことを報告しており、木林(2005)は交流の場を設定・調整する担当者の重要性を報告している。しかし、やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩には世代間交流の促進を担当する職員がおらず、施設側が主体的に日常的な交流を促しているとはいえない。ゆえに、日常的な交流を促進する担当者が不在なことが日常的な交流が実現できていない要因だといえる。また、立松(2008)は高齢者と子どもの交流が浅い段階ではスタッフが仲介役を担うこと、スタッフが交流を促すきっかけ・しかけを生活の中に創出することが必要であると報告している。ゆえに、日常的な世代間交流は関わる職員の役割も重要であり、担当者は職員に日常的な世代間交流での役割を伝える必要もあるといえる。

種村・杉山・横山(2009)は世代間交流施設のあり方として、交流スペースや交流サロン等、交流に向けての共有空間をオープンに設けたうえで、世代間で場を共用するだけではなく活動を共有できるようなしつらえが求められていると報告している。高齢者はやすらぎ家北小岩亭の中、障がい児はにじ北小岩の中と活動場所が制限されており、高齢者と障がい児がお互いに活動を共にできる共有スペースはない。共有スペースがなく、交流をするための手段を用意していないことも日常的な交流ができていない要因だと考えられる。

職員の声からあがった感染症や事故、職員の負担増加の不安は日常的な交流ができる前提で発生する問題であり、日常的な世代間交流ができない直接的な要因とはいえない。しかし、南部(2013)も交流の弊害として職員の負担が増えることや感染症、事故があることを報告している為、実際に日常的な世代間交流を実施していく中で継続して対処していくべき課題だとも考えられる。

## 第二章 日常的な世代間交流の実施

本章では、日常的に実施する世代間交流の内容と実施方法、実施した世代間交流での高齢者と障がい児の様子と変化を記述する。

### 第一節 実施方法

はじめに日常的な世代間交流を中心となって進める担当者を決定する。担当者はやすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩の職員に日常的な世代間交流は職員の役割が重要だと伝えたいうえで、改めて両施設の職員と話し合い、活動の共有スペース確保や日常的な交流の手段、交流での職員の役割等を決定する。

活動を共有するスペースに関して、平日の15時30分～17時、土曜・祝日は9時～10時40分の間はやすらぎ家北小岩亭をにじ北小岩の児童も自由に入出することが可能な共有スペースとする。なお、時間の制限は、やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩の活動スケジュールをふまえて設定した。にじ北小岩内で高齢者が活動をするると転倒のリスクが高く、見守る職員の負担も大きい為、共有スペースはやすらぎ家北小岩亭内で限定する。

高齢者と障がい児が日常的な世代間交流をするきっかけとして、にじ北小岩の毎日のスケジュールに“おじいちゃんおばあちゃんとあいさつをする”という項目を入れる。これによって、障がい児がやすらぎ家北小岩亭を自主的に訪問することを促すようにする。小山(2017)も人間関係を深めることの第一歩として、きっかけとなる「あいさつ」について指導していくことが、子ども・生徒の心身の健康な発達に繋がり、必要であると報告している。また、あいさつを促すために、あいさつができた障がい児には高齢者が障がい児のもつスタンプカードにスタンプを押すようにし、スタンプがたまった障がい児にはにじ北小岩の職員から景品としてシールをプレゼントするようにする。

吉津・溝邊(2017)は高齢者と子どもの効果的な世代間交流として宿題等で学習を一緒に取り組むことを報告している。にじ北小岩の障がい児は日々宿題プリントに取り組んでおり、高齢者も機能訓練として日々様々な脳トレプリントに取り組んでいる。そこで、日常的な世代間交流は宿題プリントを高齢者と障がい児が一緒に行うことで実現させるようにする。あいさつの際に宿題プリントを障がい児がやすらぎ家北小岩亭の高齢者のもとに持ってくることで、高齢者が宿題プリントの採点や評価を行う交流ができるようにする。

日常的な世代間交流では関わる職員の役割も重要なため、にじ北小岩の職員には障がい児がやすらぎ家北小岩亭を訪問するように促す役割をもってもらう。一人で来るのが難しい障がい児の場合はにじ北小岩の職員が一緒にきてもらうこととする。やすらぎ家北小岩亭の職員には障がい児が訪問した際、あいさつや

宿題プリントで高齢者と交流ができるように支援する役割をもってもらおう。

高齢者と障がい児の日常的な世代間交流を継続していくため、担当者は定期的に日常的な世代間交流に関してのミーティングを開くようにする。事故の不安や感染症の状況、職員の意見などを聞く場を設けるようにする。

## 第二節 日常的な世代間交流をする高齢者と障がい児の様子と変化

日常的な世代間交流を実施する前は、障がい児がやすらぎ家北小岩亭を日常的に訪問することはなかったが、実施した後は毎日障がい児がやすらぎ家北小岩亭を出入りするようになった。障がい児は職員のあいさつの促しによって全員が高齢者と関われる機会を持つことができている。高齢者は 22 名中 13 名が障がい児とハンコを押す、宿題プリントを採点するといった関わりを持つことができている。参加ができていない高齢者は認知症の進行により趣旨の理解が困難、日常生活で全介助が必要、うつ病を患っている高齢者となっている。

障がい児と関わる高齢者の変化として、活動に参加せずに傾眠をよくする高齢者が自ら日常的な交流に参加する、障がい児が訪問すると笑顔になるといった姿が見られた。他にも、高齢者がその場にはいない障がい児の様子を気に掛けることや、感情を抑えきれずに言葉が強い高齢者が優しい言葉で障がい児をほめる姿が見られた。具体例として、男性高齢者 A さんは怪我で膝に痛みが出てきたことも伴い、活動への参加は消極的となり傾眠することが多くなっていた。また、感情を抑えることも難しく、周囲へのあたりも厳しくなっていた。しかし、障がい児達が宿題プリントをもってくると A さんは進んで採点を実施し、よくできたね、と笑顔で障がい児達に話しかける穏やかな姿をみせてくれた。男性高齢者 B さんは脳のトレーニングとして職員が計算問題を渡すとやりたくない拒否をされる。しかし、障がい児が宿題プリントを持ってくると、ちょっとまってくれ、と話しながら老眼鏡を取り出し採点をする姿を見せてくれた。A さんと B さんは男性で、普段の活動への参加は消極的であるが子どもとの宿題プリントの交流には積極的となる。A さんは元々塾講師をしており、子どもに勉強を教えるということにやりがいを感じていると考えられる。B さんは子どものためなら、と発言されることから子どもの成長に貢献したいという気持ちから参加意欲が高まっていると考えられる。

にじ北小岩の障がい児の変化として、にじ北小岩では部屋の中を動き回り落ち着きがなかった障がい児が、宿題プリントの採点中落ち着く姿を見せた。他にも障がい児が自ら高齢者に会いに行く、友達を誘いあって高齢者に会いに行く、高齢者に伝わる声であいさつや御礼をする、帰りの際にあいさつを自らする姿も見られた。また、にじ北小岩では道具を取り合う障がい児たちも、やすらぎ家北小岩亭で使っている道具を譲り合う姿が見られた。にじ北小岩では落ち着き

がなかった男の子 C 君は、やすらぎ家北小岩亭を訪問した際は終始笑顔でも落ち着いた姿を見せてくれた。また、本を丁寧にめくことや高齢者にバイバイと手を振る姿も見られ、にじ北小岩の職員を驚かせていた。にじ北小岩では集中して宿題プリントをとりくまない D 君は、高齢者が宿題プリントを採点するのを静かに待ち、間違った場所を指摘されると素直に話を聞く姿が見られた。

やすらぎ家北小岩亭とにじ北小岩で高齢者と障がい児の日常的な交流を実現することによって、お互いに良い影響を与えることができている。高齢者には障がい児との日常的な世代間交流が活動をするきっかけとなっており、障がい児と関わることで社会とのつながりを得ることができたともいえる。また、学校の先生や塾の講師をしていた高齢者に関しては、障がい児への指導に熱意が見られ、自己実現の機会にもつながっていたともいえる。にじ北小岩の障がい児には、高齢者と空間をともにすることで、落ち着いて過ごせる効果が見られた。他にも、今までは話しにくいと思っていたけどあいさつをしてみたらそんなことはなかった、と話をする障がい児もおり、挨拶等の生活の模範を学ぶことや、高齢者を身近に感じられる効果がみられた。職員からも施設内に活気が出るから交流をしてよかった、今まで見たことのない高齢者や障がい児の姿を見ることができてうれしいなどの声があがった。また、職員の負担が増えるのではないかと不安な意見もあったが、負担が増えたと実感する職員はいなかった。

## 課題 継続した交流に関して

障がい児は各々の能力にあった宿題プリントを実施しており、職員の誘導もあることから、偏りなく全員の障がい児が高齢者との日常的な世代間交流に参加することをできている。一方で、障がい児と日常的な世代間交流をする高齢者には偏りができてしまっている。認知症やうつ病の影響で障がい児とうまく関わるできない、体をうまく動かすことができないためにスタンプを押すことや丸付けができないといったことが偏りの原因だと考えられる。高齢者の中には採点したいけれど体がうまく動かない、私だと問題が解けないから採点ができないといった声もあり、障がい児と多く関わりたいが率先してとりくめていない高齢者もいることが問題としてある。現状の日常的な世代間交流は高齢者と障がい児に良い影響を与えているため、継続して続けることが必要であるが、より多くの高齢者が日常的な世代間交流に参加することや意欲をもって活動するためにも、それぞれの高齢者の能力に合った新しい日常的な交流の手段を作っていくことも必要であるといえる。



## 参考文献

- 小山雄将 (2017) 「「あいさつ」が人間教育に与える効果」『人間教育研究第 1 巻』奈良学園大学人間教育学研究会、pp. 73-79。
- 片山めぐみ・隼田尚彦・福田菜々 (2014) 「世代間交流拠点としての養老複合施設の可能性と施設運営のあり方」『日本建築学会計画系論文集 79 巻』705 号 Architectural Institute of Japan、pp. 2395-2403。
- 北村安樹子 (2003) 「幼老複合施設における異世代交流の取り組み-福祉社会における幼老共生ケアの可能性-」『ライフデザインレポート』153 号 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部、pp. 4-15。
- 木林身江子 (2005) 「高齢者ケアにおける世代間交流の現状」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』19 号-W 号 静岡県立大学短期大学部、PP. 1-13。
- 厚生労働省 (2006) 「指定居宅サービス等の事業の人員、設備及び運営に関する基準」平成一八年三月三十一日厚生労働省令第七九号。
- 厚生労働省 (2015) 「放課後等デイサービスガイドライン」障害児通所支援に関するガイドライン策定検討会、p. 2。
- 鈴木麻耶 (2010) 「世代間交流とは何か」『初等教育論集 12 巻』国士舘大学初等教育学会、pp. 74-111。
- 立松麻衣子 (2008) 「高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアをおこなうための施設側の方策—高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究—」『日本家政学会誌 59 巻』7 号 日本家政学会、pp. 503-515。
- 種村俊昭・杉山茂一・横山俊祐 (2009) 「世代間交流施設における複合タイプ別の計画特性と運営者からみた交流実態」『日本建築学会計画系論文集 74 巻』636 号 Architectural Institute of Japan、pp. 355-362。
- 南部登志江 (2013) 「自我発達の観点からみた子どもと高齢者の世代間交流の意義について」『大阪総合保育大学紀要第 8 巻』大阪総合保育大学、pp. 137-147。
- 福岡理英・原祥子・小野光美 (2016) 「複合施設で生活する高齢者における子どもとの交流の意味」『島根大学医学部紀要第 38 巻』島根大学医学部、pp. 1-9。
- 森山千賀子・土井晶子 (2009) 「日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題—QOL の向上に効果的な余暇活動とは—」『白梅学園大学・短期大学紀要 45 巻』白梅学園大学、pp. 49-57。
- 吉津晶子・溝邊和成 (2017) 「調査研究シリーズ (118) 世代間交流の教育的意義に関する研究の動向と課題」『海外事業研究 44 巻』第 1・2 号 熊本学園大学附属海外事情研究所、pp. 109-127。